

## ジャーナルインパクトファクターを想う

## Journal Impact Factor: From Personal Point of View

金沢大学医薬保健研究域医学系臓器機能制御学  
(内科学第二)

山 岸 正 和

この度、十全医学会雑誌の巻頭言を執筆する機会を頂きました。そこで、今回は学術論文評価として、特に最近関心を集めていますジャーナルインパクトファクター (IF) について、筆者の想うところを述べてみたいと思います。

IFはトムソンロイター社が、当該学術誌の掲載論文数や掲載論文の被引用回数などから算定する、いわば“学術誌”に対する評価点数といえます。従いまして、厳密には論文そのものに対する評価ではないわけです。しかしながら、各学術誌とも、採択論文の選考に当たっては、それなりの厳正さを求めていますので、IFの高い学術誌に掲載された論文はおのずと注目されることとなります。ですから、内容の濃い論文ほど高いIFの学術誌を狙うことになり、研究者は研究計画の策定、実行、論文作成以上に、投稿後に気力、体力、時間を費やすこととなる訳です。勿論、世界に冠たる新発見であれば、すんなりと受理されることもあるでしょう。

2010年のIF評価では、各学術誌のIFは全般的には微増・微減ですが、中には一気に3点以上も上昇した学術誌もありました。具体例を挙げますと、筆者の教室で、投稿時点では3点台であったものが、受理された途端に6点台に跳ね上がった論文例を最近経験しています。特に、この“値上がり”を予想して投稿した訳ではありませんが、ちょっと得をしたような気がします。IFの評価が、掲載論文の引用回数によって大きく左右されることから、当然ながらIF値は年ごとに変化しています。自誌に掲載された過去の論文を積極的に引用する、総説を増やす、引用されやすい臨床ガイドラインを掲載するなど、各学術誌とも編集者がIFの上昇に苦労しているところです。筆者が副編集を務めています日本循環器学会誌 (Circulation Journal) は2010年の評価で初めて3点を超えました。2000年初頭が1点未満であったこと考慮しますと、この数年で数倍となったこととなります。筆者もIFが0.3-0.5点の頃、本誌に何編か投稿しましたが、それが今日約6倍に“値上がり”している訳です。これは、論文自身の価値が上がったものでないことを意味することは明らかで、各論文に対するIFの盲点ともいえます。反対に数年前は10点を超えていた、いわゆる難関誌が最近になってIFを下げている場合もあり、このような場合は、執筆者からは一種のなげきも聞こえてきます。その意味では、各論文のIF評価は評価時点

のIFではなく、掲載時点の値で判断するのが正確といえるでしょう。

IF3点以上を国際標準とする考えがありますが、本学からは、最近IF5点以上の研究誌への投稿も目立つようになってきました。実際、本学の学術組織であります、十全医学会が制定しています十全医学賞を受賞される研究者の方々の多くは、更に高いIFを示す雑誌への掲載後に申請されています。

研究の質を評価する際には掲載学術誌のIFのみでは不十分で、その研究がどの程度他の類似研究に影響を与えたかという、被引用回数係数を考慮する必要があります。エルゼビア社が提供していますScopusに、引用回数が表示されるサイトがあります。自身の論文が、どの程度引用されているかをみてもみるのも、別の角度からの評価として興味深いものです。高いIFを誇る学術誌に掲載されても、その後の引用が少なければ、インパクトの面で議論の的となるでしょう。当然、発表後まもない論文は未だ引用回数が少ないのは当然です。高頻度に引用される条件としては、(1) IFの高い学術誌への掲載、(2) ある程度時流にのった研究論文、(3) 将来性のある基礎研究、などが挙げられるでしょう。反面、症例報告などは、これらに該当することが殆どなく、IFや被引用回数からの評価の対象となりにくいいため、多くの学術誌で症例報告の受付を中止する現象が生じています。筆者が、Circulation Journal誌と共に副編集を担当しています、Journal of Cardiology Case誌への投稿がここ1-2年激増しています。これは、行き場を制限された症例報告論文が多数含まれているようで、中には掲載価値が非常に高い症例報告も含まれていることは、この手の学術誌を考える上で、大変重要なことと感じています。

研究費やポジションの獲得申請など、様々な局面で掲載論文の評価がなされており、この際IFが非常に大きな意味を持つことは紛れもない事実です。しかし、前述しましたように、IFが論文そのものの評価でないことは明らかです。すなわち、目先のIFだけにこだわる必要は必ずしもないことです。大切なことは、臨床研究、基礎研究、症例報告にせよ、きっちりと英文論文として残すことでしょう。学術誌としての性格上、十全医学会雑誌にはIFはついていませんが、今後とも、これらを考えながら臨床研究を進めていきたいものです。